

『夜の寢覚』 「吹く風につけても」考

——姉妹の思い出す「端近」——

赤 迫 照 子

「1」人々帰りましたまひぬる名残、つれづれに、端近うちながめて、左衛門督の、いと心うつくしうおぼしのたまひつるも、身の恥づかしさは置き所なうおほえまさりながら、「大納言の上、いつ、かやうにおほし許されなむ。幼うより、またなう思ひ睦れならひきこえしかば、吹く風につけても、まつ思ひ出できこえぬ時の間もなく、恋しく」思ひきこえたまひけり。

(卷二・二二二)

『夜の寢覚』卷二の末尾、新年、長兄左衛門督は年賀のため広沢を訪ねる。寢覚の女君と男君との仲が露見すると、左衛門督は大君に味方し、一緒になって女君を非難し辛くあたっていた。が、やはり兄妹ただけあり、姿を一目見れば左衛門督の心はほぐれ、女君に優しく接する。「1」は、左衛門督が広沢を後にし、静寂が戻った邸で、女君が姉大君を恋しく思う場面である。姉君は何時、兄君のよ

うに私を許してくださるのか、あれ程仲が良かったのに——「端近うちながめて」いた女君は、「吹く風につけても」恋しい姉大君を思い出す。

なぜ、女君は「吹く風につけても」大君を思い出すのであろうか。「つけても」とある位だから、「吹く風」とは、大君と仲の良かった頃を思い出すすがであるらしい。

そういえば、『夜の寢覚』第一部の女君はよく端近にいる。

「2」八月十五夜、つねよりも明しといふなかにもくまなきに、内にも御遊びあるべかりけれど、朱雀院の帝、御風起こらせたまへりければ、にはかにとどまりて、いと映えなく、ところどころに、ひとへに月を賞でたまふ夜あり。この源氏の大殿にも、御簾ども上げわたして、姫君たち端に出でたまひて、大君は、琵琶を、御かたちはきよらに、いと気高くて、おほのかなるもの音をゆるるかにおもしろく掻き鳴らし、中の君は、幼く小さき御程に、今宵の月の光にも劣るまじきさまして、箏の琴を弾きたまふ。

(卷一・一七)

朱雀院の体調がすぐれないため、御所の宴は中止になる。子供達はつきり父君は御所にお出掛けだと思っていたらうから、突然の宴の中止は嬉しかったのではないだろうか。太政大臣であり、琴笛の道に優れていた太政大臣だから、八月十五夜に催される御所の宴には毎年出席していたのかもしれない。翌年の八月十五夜は宮中の

詩会に出かけている。八月十五夜に父君が家にいるなんて、子供達にとつて初めてだったのではないだろうか。今夜は幸運なことに大好きな父君と、八月十五夜を過ごせるなんて――姫君達ははしやいでいたことであろう。

八月十五夜なのだから、「端に出でたまひて」月を賞でながら合奏しても不思議はない。しかし「2」のみならず、女君が大君と仲の良かった昔を回想する場面をみると、女君は少女時代、割と頻繁に端近にいたのがうかがえる。

「3」いと忍びやかに広沢に渡りたまふに、「音なからむもいかか」とおぼせば、知らず顔にて、「日ごろ、乱り心地も例ならずはへるに、寺より、『渡れ』とはべれば、今日なむ」と、大納言殿の上నికిこえたまへれど、御返りもきこえたまはず。まいて、渡り、対面しなどは、思ひ寄らずなりぬるを、ことわりながら、「人の御心の憂きもつらきも、けに我から」と、忍びがたくて、起き上がりて、車など寄するほど、端に出でて見渡したまへれば、今日を限る心地して、なにの草木も目とまるに、年ごろあの御方ともどもに、明け暮れながめつつ、故上の御面影の我はおぼえぬを、言ひ出でなごしたまひつつ、月をも花をももるどもにもてあそび、琴の音をも同じ心に掻き合はせつつ過ぎにし昔の、恋しきに、…

(巻二・一九六〜七)

男君との仲が噂にのぼり、大君に厭われた女君は、追われるようにして父入道のいる広沢に移ることになる。一言も言わずに邸を出る

のも気がひけて、今から広沢に移る旨を大君方に告げるも何も返事はなかった。いまとなつては大君と逢うのめかなわぬ。いよいよ車に乗ろうとする時、女君はかつて大君と一緒によく眺めた庭を眺める。幼い頃、姉君は母君のことを語ってくれながら、一緒に月や花を觀たり合奏をしてくださった――女君は思い出の庭を前に悲しみに沈む。波線部「もろどもに」という表現が二度現われることから、姉妹はよく一緒にこの庭を愛でており、それ故、女君にとつて眼前の庭が思い出深いもののがわかる。だからこそ女君は車に乗るため「端に出でて」いたら、思はず姉を思い出してしまったのである。

もう一カ所、やはり庭が姉妹の思い出の象徴となっている場面がある。

「4」雪かき暮らしたる日、思ひ出でなき古里の空さへ、閉ちたる心地して、さすがに心細ければ、端近くみざり出でて、白き御衣ともあまた、なかなか色々ならむよりもをかしく、なつかしげに着なしたまひて、ながめ暮らしたまふ。一年、かやうなりに、大納言の上と端近くて、雪山つくらせて見しほどなど、おぼし出づるに、つねよりも落つる涙を、らうたげに拭ひ隠して、思ひ出ではあらしの山になぐさまで

雪降る里はなほぞ恋しき

(巻二・二〇七)

我をばかくもおぼし出でじかし…
広沢で迎える冬、雪が降ったある日、女君は「端近くみざり出でて」

庭を見る。昔は姉君と「端近くて」、造らせた雪山を眺めたものだった。女君は思い出して涙する。広沢の庭を見ながら、昔の家の庭に思いをめぐらせているのである。「3」と読み合わせてみると、春夏秋冬、姉妹はよく端近く語り合い、遊んでいたらしい。端近くという場所は女君にとつて、思い出の場所なのである。

そうすると、「1」で女君が「吹く風につけても」大君を想起していた理由は明らかであろう。庭に近く、外気が感じられる場所である端近くには、大君との懐かしい思い出が詰まっている。独り端近く出て風に吹かれれば、嫌でも姉君との思い出で胸がいっぱいになってしまつて当然なのであつた。

それにしてもなぜ、大君との思い出の場所が端近くに設定される必要があつたのだろうか。端近くにいる姉妹といえは、『源氏物語』には竹河巻、玉鬘の娘である大君と中の君、それから橘姫巻、宇治の大君と中の君がいる。まずは竹河巻をあげる。

〔5〕①弥生になりて、咲く桜あれば散りかひくもり、おほかたの盛りなるころ、のどやかにおはする所は、まぎるることなく、端と近なる罪もあるまじかめり。

(竹河・六・二二四)

②中将など立ちたまひてのち、君たちは、打ちさしたまへる碁打ちたまふ。昔よりあらそひたまふ碁を賭物にて、「三番に数一つ勝ちたまはむかたに、花を寄せてむ」とたはぶれかはし聞こえたまふ。暗うなれば、端近くて打ち果てたまふ。御簾巻き上

げて、人々皆いとみ念じきこゆ。

(同二一七〇八)

弥生、桜が盛りの頃、男主のいない玉鬘郎にはさして訪問する人もなく、「のどやか」であつた。「端近なる罪もあるまじかめり」——誰にも見られる心配はないのだから、姉君達が桜に誘われて端近くに出て、それは罪もないだろう。この日、姉妹は兄中将を立会人に、碁を賭けて囲碁を打つ。「暗うなれば」とあるから、日が暮れるに従い、囲碁板がよく見えるように端近くへと移動していったのであろう。外光を取り入れるために「御簾巻き上げて」さえた。そこへ蔵人少将はやつて来る。皆、囲碁に熱中していて、誰も蔵人少将の訪問には気づかない。かねてから大君に恋していた蔵人少将はこれ幸いと、春の夕映えのもと姉君達を覗き見する。

このように、竹河巻では閑散とした邸の状況や桜、そして囲碁と、姉君達が端近くにいる理由づけが慎重になされている。逆にいえば、これらの理由づけがなければ、姉君達が端近くにいるのは不自然なのである。太政大臣の娘たる大君・姉君が端近くにいるなんて不用意であろう。現に蔵人少将に姿を見られてしまった。

橘姫巻でも、宇治の姉君達は普段は端近くなどにはいないように描かれている。八宮の留守に宇治を訪問した薫は、美しい琴を聞いて宇治の姉君達に興味をもち、もつと近くで合奏を聞こうと目論む。薫は宿直人に案内せよと命じるが、宿直人は八宮の言いつけに背くのを嫌がり、困惑する。

〔6〕①「人間かぬ時は、明け暮れかくなむ遊ばせと、下人にても、

都のかたより参り、立ちまじる人はべる時は、音もせさせたまはず。おほかた、かくて女たちおはしますことをば隠させたまひ、なべての人に知らせたてまつらじと、おほしのたまはするなり」

(橋姫・六・二七四)

②「あなかしこ。心なきやうに、のちの間こえやはべらむ」

(同二七五)

人に聞かれない時はこのように琴を楽しまれてはいますが、普段、八宮様は姫君達の存在が知られないよう気を付けていらつしやる。なのに私が薫様を案内したら八宮様に叱られてしまいます―宿直人の発言から、父八宮が姉妹にきちんとした躰をしていたのがわかる。

確かに薫は三年も通つたのに、八宮が留守のこの日に初めて姫君達の琴を耳にした位だから、八宮の教育は行き届いていたし、姫君達も琴の音が薫に聞かれないよう気を付けていたのであろう。この夜、薫の訪問を知らなかったからこそ、宇治の姫君達は安心して「簾を短く巻き上げて」(二七五)時折顔を出す月を眺め、琴を楽しんでいたのである。薫が姫君達の美しさに見とれていたところ、「人おはす」(二七六)とでも告げた女房でもいたのであろうか、「簾おろして」(同)人々は奥に入ってしまった。その際の姫君達は「おどろき顔にはあらず、なごやかにもてなして、やをら隠れぬるけはひども、衣の音もせず、いとなよやかに心苦しくて、いみじうあてにみやりびかなる」(同)様子であった。端々に姫君達のたしなみ深さが伺える。

竹河の姉妹にしても宇治の姫君達にしても、いつもは端近には近

づかないのに、偶然が重なって男性に垣間見されてしまった。それでは『寢覚』はどうか。姉妹で一緒にいるところは垣間見されていないが、女君は、対の君・但馬守女と合奏する姿を男君に見られてしまった。

九条の乳母を訪ねた男君は「いと近く、吹きかふ風につけて、琴の声、一つに掻き合はせられていとおもしろく聞こゆる」(巻一・二六)のに驚く。乳母子行頼によると、琴の音の主は隣家の但馬守女達だという。行頼曰く、

「7」①「月明き夜は、かくこそ遊びさぶらへ」 (巻一・二二七)

②「かやうに出で居て、ときどき遊ぶ、見たまふるに、…」(同)とのことだから、六月頃から九条にいる但馬守三女は、月夜にしばしば合奏を楽しんでいたのがわかる。但馬守三女はもうすぐ結婚する身、主婦になればゆつくり琴を弾く暇もないだろう。九条では独身最後の時間を惜しみ、琴を楽しんでいたのではないだろうか。この彼女の合奏の様子は男君の乳母の家の者達によく知られていたから、行頼にすれば今夜も「いつもの事」であった。ただいつもと違うのは、合奏に女君が加わっていたことである。

「8」母君まかり通ひ、よそ人にもあらねば、女もやがて御前に参りて、めでたくをかしげなる御様を、明け暮れかくて見ばやと、若き心地には思ひけり。かたみなつかしくおほえて、風涼しく月明き夜、山里めかしくおもしろき所なれば、端近くみざり出でて、物語などしたまひつづながめたまふ。御物忌は十七日

なりければ、これは十六日の夜なり。 (巻一・二五〇)

物忌のため、女君は九条ですこすことになった。母を介してお目通しすると、たちまち但馬守三女は美しい女君を慕うようになる。女君の方も但馬守三女を親しく思う。物忌の前日である八月十六日の夜、二人は仲良く「端近くみざり出でて」秋の夜を楽しんでいた。やがてどちらからともなく、琴を弾こうと言ひ出したのであろう。その琴の響きが男君の垣間見を誘ひ込み、女君は男君と契りを交わすことになってしまふ。

いくら風が涼しく月が美しい夜であり、山里のような風情がもの珍しかったにしても、太政大臣の姫君が九条で「端近くみざり出でて」いたというのは感心できた話ではないだろう。但馬守三女も軽率である。「7」のように、何しろ日頃から合奏の様子が隣家に筒抜けだったのである。いつも気安く端近に出ていたのであろう。宮中將との交際が噂になっていたのも鑑みると、但馬守三女には元々軽々しいところがあつたといえる。女君の乳母代わりであるはずの対の君も、一緒になって合奏する位だから、女君や但馬守三女の作法を咎めたり、注意しなかつたはずである。本来ならば女君が端近に出るのを制するべき立場にあるのに、それをしなかつたというのは、また「いと若うあてやかにをかしき」(巻一・二四)であるが故の思慮不足であらう。それに対の君にとって兄僧都の九条の邸は「心やすき所」(巻一・二五)であつたから、つゝ気が緩んでしまったのであろう。対の君は太政大臣から寵愛されていたため、同じく召人

である大君の乳母からいじめられていた。対の君は時々、何かと肩身の狭い太政大臣邸から逃れ、九条で羽を伸ばしていたのである。

だが、たとえ但馬守三女が軽々しく、対の君が油断していたにしても、「端近くみざり出でて」しまつた女君自身に自覚が足りない。端近に行くことへの抵抗感が全くみられないのである。竹河巻では「普段は姫君達は端近に出ない。この日だけが特殊だったので」という意味合いの記述がされていたし、橋姫巻でも、姫君達は琴を「下人にて」聞かれぬような神経質になっていたとある。これら『源氏』の二組の姉妹のような姿勢は、『寝覚』の女君にはみられないのである。それもそのはず、前述のように、女君は幼い頃からいつも大君と端近で遊んでいたのだから。九条で過ごした夜も、いつも姉君とするのと同じように端近に出て、いつものように箏の琴を弾いて遊んだだけなのである。女君と但馬守三女は九条で初めて対面したが、親戚のよしみもあつて親しみやすかつた。但馬守三女の年齢は大君とさほど違ふまい。奇しくも但馬守三女も大君と同じく、結婚をもうすく控えている。女君には但馬守三女と大君がいくらか重なつて見えたのではあるまいか。この時、女君と但馬守三女は身分差を超えて、いわば擬似的な姉妹関係にあつたといえよう。だから女君は易々と「端近くみざり出でて」しまつた。おまけに今夜は八月十六日。いつそやの八月十五夜、父君の前で大君と琴を弾いた時の楽しい思い出が女君の胸によぎつたのではないだろうか。今年 は家族と一緒に仲秋の名月を楽しめなかつた女君は、代りに但馬守

三女や対の君と遊んだのである。大君との思い出の場所が端近に設定されたのは、九条での端近の合奏を可能にし、男君との契りという展開を必定にさせるためなのであった。

意地悪な見方をするならば、「寢覚」は「3」↓「4」↓「1」と、端近にいる女君が、端近における姉妹の思い出にひたる」というパターンを重ねることによって、「九条で女君が端近にいたのはいつもの習慣だったのだ。だから、仕方がなかったのだ」と、女君の不用意さについて後から言い訳を施したように感じられる。もしくは、高貴な生まれの女主人公がなんと九条の邸の端近で、軽々しくも受領の娘や女房と合奏をしていた「謎」を、「3」「4」「1」で種明かししてみせたようにも見える。

女君にとって端近は姉との思い出の場であるとともに、天人にわが琴の音を聞いてもらうための晴れの舞台としても設定されている。「2」、初めて天人が夢に現われた年、女君は「端に出てたまひて」（巻一・一七）琴を弾いていた。天人の言葉「今宵の御箏の琴の音、雲の上まであはれに響き聞こえるを、訪ね参で来つるなり」（巻一・一七）をよく覚えていた女君は、天人によく聞こえるようにと幼心にも思ったのであろう、翌年、「端近く御簾巻き上げて」（同一九）琴を弾いて天人の来訪を待った。次の年も「格子も上げながら」（同一〇）天人を待ち続けたとある。女君にとって端近は非現実の世界へと自分を誘う魅惑的な場所でもあった。「いてはいけない場所」だ

とは意識されなかったのである。

とはいえ、普通は成長するにつれて、不用意に端近に出てはいけないこと位は解るはずであろう。でも、女君には解らなかつた。これは女君の受けた教育が十全ではなかつたことを意味しよう。女君は「いとよかりし御乳母も亡くなりて、おとなおとなしき後見もなきままに」（同一四）なつていたという。対の君は「いと若うあてやかにをかしき」（同一）であつたから、女君をしっかりと教育するのは無理であつた。それに比べて大君には「やむことなき御乳母」（同一）がいる。乳母の教育が功を奏したのであろうし、大君本人にも元々弁えがあつたのであろう、大君は「ことごとおとなびたまひにたる」（同一二）女性に成長した。よく妹と端近にいたといつても、それは少女の頃の話で、あくまで安全な太政大臣邸の中だけに限つたことである。

大君はたしなみのある女性に成長したが、妹をちゃんと躾るまでには至らなかつた。無邪気すぎる妹に端近の危険性を教えなかつたのは姉として責任があるうが、いくらしつかりした大君でも妹の教育を担える程の余裕などあるまい。さして女君と年が離れてはいないのだ。女君の母代わりはいくら何でも無理であろう。

乾澄子氏は母親の不在が女君に及ぼす影響について、次のように述べられた。³⁾

極論すれば、寢覚の女君の悲劇は、自らのセクシユアリティにイニシアティブをとれないことに起因しているとも思われるの

である。すなわち、〈母〉に自らの善美を愛で、愛されることなく育った女の子は、自らの身体を意識し、把握することなく成長する。(たとえそれが継母など)によって、反対の形で意識させられるにしても)母親の愛を知らない女君は、自らの魅力を知ることもなく、女としての生き方のモデルを身近に見ることもない。それなのに、その身体的な美は、様々な人物の視線を通して語られることによって、他人に所有され、彼女の運命にも影響を及ぼすことになる。このことが女君の拙い宿世の遠因になると言えよう。

まさに乾氏がいわれる如く、女君が簡単に端近に出してしまったのは、自分の身体が欲望の対象であることに全くもつて無自覚であったからに違いあるまい。父太政大臣は、女君と男君の不倫の噂を聞いて、「9」母なき女子は、人の持たるまじきものなり。形のやうなりと、母の添ひてあらましかは、いみじく思ふとも過たざらまし。また、人もかく言はざらまし。そこはかとなき若き女房を、うちあづけて姉妹のあたりにあらせたる怠り、咎なり」

(巻二・一七九)

と、母の不在を嘆き、女君への教育に配慮が欠けていた「怠り」を責めている。男親では娘の教育に限界があり、女親でなければどうしても行き届かないことがある。母親の不在によって女君はひどく天真爛漫なまま成長してしまった。彼女の天真爛漫さはかけがえない美質であったが、その美質は女君の不幸の種そのものでもあ

ったのである。

『寢覚』の女君同様、『源氏』の女三宮も母親がおらず、父親に溺愛されて育ち、そして無防備に端近へ出て行く女性であった。若菜上巻、六条院で蹴鞠が催された春の日、御簾の側に立っていた女三宮は夕霧と柏木に姿を見られてしまう。貴女は「いはけなき御ありさま」(若菜上・五・一三五)なのだから、夕霧に姿を見られないよう気をつけなさいと源氏から戒められていたにも関わらず、である。

「正身の御ありさまばかりをば、いとよく教へきこえたまふに、すこしもてつけたまへり」(同二二)とあるから、源氏は常日頃から女三宮を教育し指導していたようだが、女三宮は「すこし」気をつけただけであった。結局、蹴鞠の日に姿を見られたのをきっかけに柏木と密通、そして薫を出産、出家しても、女三宮はたいして成熟することはなく、いつまでも精神的に幼いままで年をとっていく。

『寢覚』の女君の場合、端近にはいけない、男性に姿を見られるかもしれないから用心に用心を重ねなさいなんて、誰も教えてはくれなかった。それでも、「13」二重傍線部「人の御心の憂きもつらきも、げに我から」とあるから、自分の責任で不幸を招いてしまったのだと一応は自覚しているのである。ただし、果して「端近などにはいけないかった、自分が無防備に過ぎていた」とどこまで反省できているかはおぼつかない。それでも、柏木に見られた事を夕霧から源氏に言いつけられるかもしれないと恐れ、「人の見たてまつ

りけむことをおぼさで、まつ憚りきこえたまふ心のうちを幼かりける」(若菜上・五・一三五)——自己の責任には考えが及ばず、ただ源氏に叱られることにはかり怯える女三宮よりは、また成長の萌芽が見られるのである。

九条における合奏が男君に垣間見される場面は、橋姫巻の引用だと先学によって指摘されてきた。『寢覚』は宇治の姫君達の慎重な姿を反転させて取り込んだのかもしれないが、同時に、女君には女三宮の面影も重なるように思われる。もしも女三宮が自分の力で成長していったならば——このような発想が女君創造のきっかけになったのかもしれない。

端近にいてはいけないことすらよく解らなかつた少女が、母となり、いつしか自分の生を自分で掴み取っていくまでに成長する物語——それが『寢覚』なのである。

〔注〕

(1) 『夜の寢覚』本文の引用は小学館『新編日本古典文学全集』(鈴木一雄氏校注・訳)による。なお、末尾の()内に巻・頁数を付記し、傍線を私に付した。

(2) 『源氏物語』本文の引用は『新潮日本古典集成』(石田稷二・清水好子氏校注)による。末尾の()内に巻・頁数を付記し、傍線を私に付した。

(3) 乾澄子氏『夜の寢覚——母なき女子』の宿世——『古代文学

研究』第二第6号 古代文学研究会 平9・10)。なお、母親の不在が女君の人格形成に大きく関わっていることについては、永井和子氏『寢覚物語の「中の君」——男性主人公から女性主人公へ——』(松尾聰教授古稀記念 源氏物語を中心とした論放』笠間書院 昭52・4)、横井孝氏『母性論としての『寢覚物語』』(『源氏物語とその前後』1 新典社 平2)、足立彌子氏『夜の寢覚』発端部と継子物語——『母』物語としての位相——(『中古代文学論攷』第十二号 早稲田大学大学院中古代文学研究会 平3・12)、乾澄子氏『夜の寢覚』——『母』なるものとの訣別——(『古代文学研究』第二次第二号 平5・10)、井上真弓氏『性と家族、家族を超えて』(岩波講座『日本文学史』第三巻 平8)等がある。

——あかさこ・しょうこ、広島文教女子大学非常勤講師——